

ら、現場の第一線で働く人等の底に流れる物は、日本、香港、シンガポールと人種は違えども同じ様な気がします。また企業先、下請等と話しをする時は、いかに自分の言質をとられない様にするか、半分法律屋になった様な気持です。そんな時自分は本当に Civil Engineer なのだろうかと思えます。しかしこれもまた、本当の意味での Civil Engineer の仕事なのです。最近では自分自身の結論として、海外における Civil Engineer は、まず第一にその国の歴史、地理、国民性、経済、宗教、文化等を研究し、その国のレベル、常識を自分でつかみ、彼等がこのプロジェクトに対して何を望んでいるかを見きわめる事が大切である。これを理解した上で、実務上必要な契約書等のスタディをする。前述した様に、その国を理解しその国にとって最も良い物、良い方法を研究し、見出し、それを実現させる総合的な知的活動が海外における Civil Engineering の一面であり、また最も重要な事である。現地に密着しない Engineering は何の意味も持たず、長続きもしない。Civil Engineer として正しい知的活動を行うためには、専門分野に限らずあらゆる分野に目を向ける事が必要である。

Civil Engineering, と言うと夢は宇宙まで限りなく広がっていきます。しかしわれわれ海外工事の第一線で働いている者にとって、今現在必要なのは、現地に喜んで受け入れられる方法、技術を見つけ出し、実現する事ではないでしょうか。

(筆者・Akira OHBA, 西松建設(株)シンガポール MRT)
工事事務所 工事係長 (在シンガポール)

ビルマでの技術協力—橋—

多 久 和 勇



私は、国際協力事業団のビルマ橋梁技術訓練センターで、コンクリート橋工学専門家として、1984年3月から本年7月まで技術協力に携わる機会を得た。

当プロジェクトは、1979年7月から本年7月まで6年間、プレストレストコンクリート(PC)長大橋の建設技術をビルマ人技術者に移転するのを目的に実施されたもので、その内容はセンター内訓練と実橋訓練に大別される。

センター内訓練では、最初の3年間(基礎コース)で57

名の橋梁設計技術者を養成し、あとの2年間(上級コース)は、選抜された10名に対しPC長大橋の設計技術の移転を図った。実橋訓練では、主橋梁部が中央径間100mのディビダグ工法によるPC3径間連続箱桁橋で、橋長300mのツアナ橋を、実際に施工しながら施工技術の移転を図った。

ビルマで最初のPC橋は、ラングーン市内のタケダ橋の取付部にある支間30mのPC単純合成桁であり、1962年にカナダの技術援助で建設されたものである。その後20橋程度建設されているが、いずれもタケダ橋の図面をそのまま使用したコピーであり、ビルマ人技術者自身の設計によるPC橋は建設されていなかったようである。

しかし、プロジェクトが終了した現時点では、センター内訓練の基礎コース訓練の一つとして実施した中小橋の設計演習の成果品をもとに、3橋が建設中であり、また上級コース訓練として、その概略設計から詳細設計までを設計演習で実施したナウアン橋(主橋梁部:77m+110m+77m)についても、ビルマ側は建設に着手しようとしている。

このように徐々に技術協力の成果が表われ始めており、ビルマ人技術者の手により設計されたPC橋が実現されつつあることは携った者のひとりとして嬉しい。

またビルマ政府の当プロジェクトに対する評価は大きく、日本の協力に非常に感謝している。

今後、このような技術協力が多くの開発途上国で大いに実施されるべきと感じている。

(筆者・Isamu TAKUWA, 日本道路公団広島建設局)
東広島工事事務所

ソロ河流域で小水力発電

澤 田 英 敏

ソロ河。流域面積16000km²、流路長600kmに及ぶインドネシア・ジャワ島最大の河川である。古くは日本でも、歌・“ブンガワン・ソロ”でその名を知られている。乾期の今、ソロ河はそのメロディの通りゆったりと流れ、水辺で水浴の牛を追う子供達の情景はのどかである。このソロ河流域は農業地帯で工業と言えばパテック(伝統的染物)程度であるが、1980年に上流域でウォノギリダムおよびその灌漑施設が完成してからは安定した2.5期作が可能になり、活生水準の向上が著しい。流域では